

ベトナム、ホーチミンにおける教育事情（平成18年度～20年度）

前ホーチミン日本人学校 校長

三重県南牟婁郡紀宝町立相野谷中学校 校長 有 城 美 晴

キーワード：現地理解，英会話

1. はじめに

意外と知られていないことだが、ベトナムはブラジルについて2番目のコーヒー生産国ということだ。コーヒー生産国であるためか、ホーチミンのいたるところでコーヒブレイクを楽しんでいる人たちを見かける。特にオープンカフェで多く見かけるのは男性である。女性は私の印象ではとても働き者といった感じを受ける。市場で見かける人たちはほとんどが女性であり、男性はその女性の指示を仰ぐといった風情である。女性の強さは体感したところであり、街中で大きな声で言い争いをしているのはほとんどが女性であった。実に女性はパワフル、ポジティブ、といった感である。

ベトナムの政治の中心は、首都である北部のハノイ、経済の中心は、南部ホーチミンと言われる。都市自体も緑に覆われたハノイ、南国の明るいホーチミン。また、気質も南部は大らか、北部は誠実と言った印象である。同じベトナム語でありながら、しゃべるアクセントは違うことはもちろんである。よく言われることは90ドルあったら、ホーチミンの方は10ドル借金して100ドルにしてみんなで食事会をし、ハノイの方は10ドル稼いで100ドルを貯金する、と言った両市の気質を表した話がある。私なんぞはなるほどと納得してしまう。こんな事もあった。毎朝渋滞する場所、その朝に限ってやけにすいているので、学校到着後、ベトナム人スタッフに「今日何かイベントでもあるのか？」と聞くと「今日は寒いからみんなベットのの中でしょう。」と答えた。一年目の私だったら「まさか」と思っただろうが、3年目にして「ホーチミンなら、あり得る。」と素直に受け止めた。他の3年目の派遣教員にも聞くと、私と同意見であった。宵越しの金は持たないと言った風情のホーチミンっ子、いろんな事を「コムサオ（どうって事ないよ）」と答えてくれるホーチミンの方々、まさにホーチミンの風土にずいぶん救われた3年間であった。

2. ホーチミン日本人学校について（平成21年3月現在児童生徒総数211名）

(1) ホーチミン日本人学校の概要

ホーチミンには、平成21年3月現在、インターナショナルスクールが約50校以上ある。ここ2、3年で急増した。町中の建設中のビルが、いつの間にか看板にインターナショナルスクールと明記されていて、驚かされる。ベトナム教育局もこの多さに手を焼いているのではないと思われる。よく引き合いに出されるのは、日本人学校や敷地隣接の台北学校や韓国学校（どちらも幼稚園から高校まで、児童生徒数は韓国学校1000人弱、台北学校600人）や英国学校などの教育の質の高さである。

学齢期にある邦人の子女は約300名あまり、そのうち約7割の子ども達が本校に通学している。その他は現地校、インターナショナルスクールに通学し、土曜日に補習校（3月現在約90名）に通っている子たちもいる。運営委員長から常に言われたことは、インターナショナルスクールに通う子どもたちを日本人学校に呼ぶ込むためにも、「特色ある学校作り」と「学力向上で成果を」、の2点だった。

子どもたちは、教職員が描いたとおりの授業を見せ、時には授業計画案に書かれた到達目標以上の力を見せた場面もあり、見せる場面で力を発揮し、パフォーマンス力やプレゼンテーション力、聴く耳を持つ子どもでもあった。また明るく社交的、心が開放的、すべてを受け入れようとする態度、自尊感情の育った子どもたちが多かった。

教職員たちも、優秀な派遣教員が多く、様々な学習発表会での企画運営や授業研究、放課後活動等の持ち場で力を発揮する教員であった。

(2) ホーチミン日本人学校の英語教育

ホーチミン日本人学校は、小学部は週3コマ、中学部は週2コマの英会話時間をとっている。各クラス10名前後の編成であり、フィリピン出身の非常勤3人、常勤講師イギリス人の計4名で行い、ケンブリッジやオックスフォード出版の教材を使っている。19年度は小学部が“Get Set Go !”, 中学部は“Lifelines (Elementary, Pre-Intermediate)”, 20年度は小学部が, “Super Tots” および “Super Kids”, 中学部は “Connect” を使い、習熟度にあわせてクラス編成を行っている。

英会話の狙いは「英会話講師との授業を通して、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながらコミュニケーション能力の素地を養う。」である。英会話教師には、学期ごとに児童生徒へのコメントを書いてもらい児童生徒への意欲向上に向けての一助としている。

英会話授業に対する英語コーディネーターの役割は大きく、まさしく英会話講師と日本人学校の望む英会話授業のコーディネートを行う。役割は多岐にわたり、シラバス作成、習熟度別クラス編成、転入生レベルチェック、児童の支援、教材選定、英会話講師への指導助言、年2回の公開授業に向けての企画運営、学期ごとの全児童生徒へのコメントチェック、保護者からのリクエストの回答、就職活動の英会話講師との面談、英会話通信、副教材の開発と紹介、学級担任との連携等々がある。19年度から英語コーディネーターに来ていただいたのであるが、PDCAを常に実践されていて実によくやってくくださった。

3. 訪問や聞き取り調査を通して

(1) 平成20年5月11日（毎年参観の内、20年度分）日本語スピーチコンテスト参観

日本語を学ぶベトナムの方は約3万人。うちホーチミンを中心として南部で約1万8千人の方が、20校から30校ある日本語学校で、学んでいる状況である。日本語を勉強しているベトナム在住のベトナム人、および外国人を対象にコンテストが行われる。日本語学習者がスピーチコンテストに自ら参加すること、また見ることによって、他の学習者の到達度を知り、自分の到達度目標を知り、また再確認し学習意欲を高め、その結果として、学習者全体の日本語力が高まることを目的にしている。

一次審査（応募者88名の書類審査）、2次審査（24名による口頭発表、質疑応答）を経て、本選（当日）では14名に選ばれた。本選に臨んだ14名の方々はいずれも日本語が堪能であり、スピーチのトピックも、戦争やボランティア、社会現象等、様々である。その中でもとりわけ1位と2位の方は、どちらもボランティアとして参加したある出来事から、自分の今の現状を、将来の自分にどのように繋げていくかという、展望を述べたもので、内容も聞き手をひきつけるものであった。出場された皆さんの日本語がとてもきれいで、よどみなくお話をされ、18年度から参観しているが、年々このコンテストの質が高くなっているとの感を受けた。

(2) ベトナム日本人材協力センター（VJCC）訪問（6月24日）

「中学校における日本語教育プロジェクトについて」という実践報告があるというので、ホーチミン郊外にあるベトナム日本人材協力センター（VJCC）を訪れた。実践報告は、学習スタイルと授業の様子、ホーチミンの実践紹介、ハノイの実践の様子についてであった。

中学校における日本語教育プロジェクトの目的は、ベトナムにおける教科書を作ること、教えること、日本文化の紹介、日本語教師を育てること、の4点である。

日本語が定着する子ども達の様子を見ると、「自分の日本語が日本人に通じる」ということが最大の日本語習得の成功であり、そのことにより話すことに自信を持つ事、さまざまな機会を持ち、日本人と接触を多く持つ事、等があげられるとのことである。

さまざまなイベントへの参加→日本語での表現→より多くの人に自分を表現する→より自分の世界が広がる→日本語習得への意欲が出る→いろいろな場で日本語を使おうとする→日本語のコミュニケーションへの自信がよりいっそう深まる、といったスパイラルアップがされている。日本における外国語教育の示唆を頂いた訪問であった。

(3) English First 及び Clever Learn 英会話学校訪問（平成18年～20年）

2校を訪問して感じたことは、生徒たちは英会話に積極的であり、自分から積極的に英語をしゃべろうとする意欲が高い事であった。日本とその姿勢が違うと思い、ある学生に聞くと、少しでも英語がしゃべることができると、すぐ給与にはね返ってくるシステムになっている、企業も英語ができる人を雇いたい、と返事であった。しかしこの学校に通っている者の中には高校生もあり、その生徒の授業態度は上記の方々とは少し違ったものがあった。その事例は経済的に裕福な子ども達に多くみられた。

どの学校もカリキュラムがしっかりしており、ネットによる自宅学習やレベルチェックテスト、模擬テスト等、英語教育環境が整備されていた。

(4) 聞き取り調査（平成20年～21年）

上記三つの訪問活動の他に、数名のベトナム人に対して、日本人の印象や日本語学習についてたずねた。以下にその回答を列記したい。

①外国語情報大学（6000人の学生のうち400名が日本語学科）の2学生に対する聞き取り調査から

「日本人のイメージ」に対しては、「あいまい」、「時間が厳しい」、「小さなことを気にする」との答えであった。

「なぜ日本語を勉強するのか」に対しては、「やはり一番は就職に有利」、「英語だとみんなができて当たり前。しかし日本語はまだまだ話す学生の割合は高くない」との答えであった。

「なぜ日本語がそんなにできるのか」に対しては、「とても勉強する」、「CD等の教材を使う」、「チャンスがあればしゃべる」、「アルバイトをする（旅行ガイドや日本人にベトナム語を教える等）」との答えであった。

②本校勤務の中国系ベトナム人スタッフに対する聞き取り調査から

「日本人のイメージ」に対しては、「仕事に厳しい（時間等）」、「依頼するときの要求が高い」、「郷に入れば郷に従えるな度量はなく、日本と同じレベルで要求する」、「仕事の態度を大切に」、「仕事の企画の通りする」、「臨機応変にすることはできない。そのときの対応で判断することができない。ベトナム人はその場で臨機応変に対応する」との答えであった。

「なぜ日本語を勉強するのか」に対しては、「日本の文化や技術に興味を持った」、「ベトナムでは、made in Japanの物は優秀。その理由を知りたかった」、「中国語と日本語の共通点があったが、ひらがながわからなかったので、勉強した」との答えであった。

「なぜ外国語（日本語）を流暢に話すことができるのか」に対しては、「ベトナムはフランスやアメリカとの戦争があったが、外国を受け入れる素地を持っており、海外の文化を受け入れやすい風土がある」、「外国の方と積極的にコミュニケーションをとろうとする態度は、都会出身者に言えることで、地方出身の生徒は、文法的にできるにもかかわらず、恥ずかしがり、うまくそれができないようだ」、「最近では政府も語学（特に英語）のエリート教育に力を入れており、ベトナム系インターナショナルスクールが10校ほどできている」、との答えであった。

4. 最後に

3年間、旧サイゴン、ホーチミン生活は楽しく、苦しく、もがき、悩みの連続であった。一番救われたのはやはり子どもたちの笑顔であり、教職員の教育活動で見せる力、英会話コーディネーターやベトナム人スタッフのすごさ、教頭存在であった。また、運営委員長にもずいぶん相談し助言も頂いた。赴任中、校舎増築があり、その関係でベトナム関係機関との折衝や、領事館、日本商工会の方々や近隣の韓国学校や台北学校の校長先生等、いろいろな方々と率直にお話しできたことは大きな財産であった。また在外と言うことで、日本という国や日本人を強く意識させられた。今思うとすべて夢の中であった感ではある。ベトナム、ホーチミンで出会えた皆さんに感謝したい。ありがとうございました。